

## 株式会社 光波



### An Enterprising Company

時代の波に乗り、人々の生活を支え、活躍の幅を広げ続けるLED。浜松、津南、バングラデシュと3つの生産拠点を結び、製造プロセスと物流とを支える基幹系システムをInfor ERPで実現した。全社規模での会計、生産管理、サプライチェーンマネジメントシステムは、LEDのエンジニアリングカンパニーである光波の明日の経営を担う「光」となることを目指している。

“ 業務のオペレーションをInfor ERPに合わせることで、全社規模でのプロセス標準化が実現できました。これにより、各拠点で同じレベルで在庫の把握ができるようになり、リアルタイムな管理が可能となりました。

”

株式会社 光波  
管理本部 情報システム室長  
梅谷 勝氏

INFOR™

## LED製造、組立ラインの「いま」を照らす

低消費電力、小型軽量、長寿命といった優れた特性で、用途や市場がますます拡大しつつあるLED（Light Emitting Diode：発光ダイオード）。株式会社 光波は、その設計、製造からLED応用製品の組立、モジュール化までを一手にこなすリーディングカンパニーだ。表面実装用のチップLEDランプ、7セグメントLED、ドットマトリックスLEDなどの表示ユニット、電球互換のマルチLEDランプから各種自動販売機用部品、照明用モジュール、イルミネーション、鉄道信号などの応用製品までと守備範囲は広い。

たとえば、飲料・たばこ用自動販売機の商品選択ボタンでは、シェアは約90%程と圧倒的だ。国内に製造、組立の拠点をもち、海外バングラデシュにも工場を構える同社が、それらすべての事業所を束ねる基幹系システムの根幹として選択したのが、Infor ERP Baan5.0cだ。

光波がERPパッケージでシステムを刷新しようとした目的は、以下の3つだった。第1に、収益、経費、在庫などのタイムリーな把握による経営実態の「見える化」、第2に、とかく属人的になっていた業務を標準化・ルール化することによる業務の合理化、第3にムダを排除することによる在庫、経費の削減である。

2004年に始まったERPの導入計画は、2007年1月には稼動を開始し、本番での運用が始まった。生産管理と会計パッケージにより、日々、同社の経営を支えるデータを海を越えて集約し、分析に利用している。株式会社 光波 管理本部 情報システム室長の梅谷 勝氏は、Infor ERP Baanの導入当初の状況を振り返り次のように語った。

「ERPパッケージに期待していたのは、ベストプラクティスでした。従来、生産管理、会計など、部署ごとにばらばらだった業務処理の仕組みを統合的なERPパッケージに置き換え、それを活用することで意思決定を迅速化し、利益とコストをしっかりと把握して業務フローを合理化したかったのです。」

システムが稼動している現在は「Infor ERP Baanは業務手順のすべて」であり「Infor ERP Baanを止めると仕事も止まる」という状況までシステムが活用されている状況だという。

同社は、本社機能自体は比較的小規模であるものの、国内に2つの工場を有し、さらに海外にある工場には1,300名を

### 囲み

社名	株式会社光波
導入製品	Infor ERP
業種	製造業(LED製品の製造・組立)
従業員数	日本国内 約220人、バングラデシュ
本社	約1,300人 東京都練馬区

超えるたくさんの従業員が働いている。それら生産拠点を、1つのシステムで結ぶことが大きな課題でもあった。しかも、静岡県浜松のチップLED工場は装置、デバイス系のプロセス製造型、新潟県津南の組立工場はアSEMBル型、そして、バングラデシュの拠点はこれら2つのタイプの混在型と、同じ生産の業務でもその内容は異なっていたのだ。そのため、生産管理のシステムにもそれぞれ異なる対応が要求され、それを1つのERPパッケージという柱のもとで調える必要があった。

Infor ERP Baanを選んだ1つの理由は、「製造業に強いパッケージ」だという評判に期待したという。企業規模的にもそれほど大がかりな情報システム部門を抱えられない事情もあり、導入前はERP製品を「うまく使いこなせるか不安もあった」と梅谷氏は言う。結果的には、満足いくレベルで日々のオペレーションをこなせるようになるまで、それほど大きなカスタマイズは必要なかったとのこと。また、企業規模はそれほど大きくなくても、システムのグローバル対応は重要な選択要素だったという。

「Infor ERP Baan導入以前は、業務上の課題を経営レベルの議題に載せようとする、月末に一旦全ての数字が締まるのを待って、それから議論に入る必要がありました。さらに海外バングラディッシュの実績は、場合によっては翌々月にならないと確定しないということもありました。これでは、結論を出して行動を起こすのにいつもひと月以上の遅れが出てしまいます。技術も市場も日進月歩、グローバル展開を考えると、これでは遅すぎます。Infor ERP Baanを導入してからは、バングラデシュ分も含め、全ての事業所の在庫の増減が同じ基準で、毎日、把握でき、リアルタイムな経営、グローバルなオペレーションを展開する素地ができました。つまり、常に今を見て議論が

できるようになったのです。」

ローカルルールを作らずに、Infor ERP Baanで実装されているプロセス様式に従って業務ルールを統一することで、国内、海外、すべての生産拠点において、同じレベルで販売予定、仕入れ金額、在庫金額が把握できる。しかも、梅谷氏によると「一旦システムが回りオペレーションが定着してくると、加速度的にERPのメリットを享受できるようになる」とのこと。とくに、地理的に遠く離れた海外の事業所でも、国内の工場と変わらぬレベルで在庫管理、圧縮、削減を議論することが可能になったことは大きな進歩とのことだ。

## オペレーションの見える化から コントロールレベルでの経営効率化へ

将来へ向け技術革新が発生する可能性も大きい業態にあって、トップをいく同社にはスピード経営がきわめて重要だという。同時に、コストに対する要求も高い。長い年月に亘り「同じもの」を「同じ場所」で「同じように」作り続ける可能性は限りなくゼロに近い。変化はかならず必要になる。オペレーションレベルでの業務の「見える化」の実現は、企業経営において先を見ることへとつながる。将来は、オペレーションからコントロールのレベルへと情報システムの活用領域を広げて、大局的な見方を情報システムの分野から支援し、同時に、より効率的なシステム運用を実現していきたいという。

一方、独自の生産方式への対応といった点では、まだこれから解決すべきシステム上の問題も多いとのこと。変化の早いマーケットニーズに対応するために、どうしても現場では、計画をきっちり立ててそれに従って作るよりも、臨機応変に実績を考慮して調整しながら作るという対応力が不可欠であると梅谷氏は指摘する。

「従来のシステムでは、できたものに対し完成報告を作り、それを受けて販売し売上が立つという、比較的ゆるやかな連携で業務フローが組み立てられていました。現在は、製販の流れを一体化させていますので、計画が先にきちんとなければなりません。現場の作業手順、情報処理フロー、マネジメントスキームなど、全体が変わらなければならないのです。」

Infor ERP Baanの導入をきっかけに、物作りから販売にいたる業務の流れについて、全ての領域、すべてのレベルで考え方を変える必要があるという。生産管理のパッケージのうち、とくに計画系はアSEMBルが主体の工程では力を発揮し

「製造に強いという評判と、グローバル対応に期待してInfor ERP Baanを選択しました。、いまではInfor ERP Baanは業務のすべてであり、Infor ERP Baanを止めると仕事も止まってしまう。」

管理本部 情報システム室長 梅谷 勝氏

ているものの、プロセス生産の現状と合わせるには、まだまだ苦勞している部分もあるという。こういった部分に対しても、計画系のスムーズな処理を実現していくのが今後の課題の1つでもある。

## 課題を越えさらに一步先のシステムを目指す

Infor ERP Baanの利用をベストプラクティスとして積極的に推進した過程で、既存のERPシステムに対する不満も出てきているという。これは、システムを活用しているからこそ出てくる前向きな課題だ。

「業界や国ごとに異なる、商習慣に対応するための方策も今後増やして欲しいところ。独自の要求を取り込むカスタマイズに対する寛容性ととも、ユーザーの要求にきめ細やかに応えるためのアドオンサービスの充実にも期待します。」

光波をとり巻く現状は、生産現場のみならず製品の販売市場自体もグローバルなものへと拡大する可能性が出てきている。LEDの消費電力は実効ベースで電球の10分の1。高輝度のLEDチップの量産化が実現すれば、世界中にある既存の照明設備の多くがLED化するのもそう遠い将来の話ではない。現状では、光波の市場のほとんどが日本国内に限定されているが、早急な経営体制のグローバル化で、海外市場の開拓も大きく期待される。その際には、基幹系のシステムのグローバル対応機能が、今後さらにその重要性を増すことになるのだ。

### インフォアについて

インフォアは、実績と機能性の両方を兼ね備えたソフトウェア製品を積極的に買収し、さらに専門知識が豊富なエキスパートの手によってその価値を高めています。そして、継続的な技術革新、迅速な導入、グローバル対応、様々な導入方法の提供を通じて、ビジネス・ソフトウェアの一層の発展を目指しています。こうした方針を背景として、インフォアは数年という短い期間でビジネス・ソフトウェア市場をリードする企業へと成長を遂げてきました。詳細については、[www.infor.com](http://www.infor.com)をご覧ください。

日本インフォア・グローバル・ソリューションズ株式会社  
〒163-1035  
東京都新宿区西新宿3-7-1  
新宿パークタワーS35階  
電話：03-5339-4711  
ファックス：03-5339-4700

製品の入手方法についてはお客様の地域のインフォアへご連絡下さい。

**INFOR**™